

般若経の三乗思想

渡 辺 章 悟

はじめに

三乗 (tri-yāna, trīṇi yānāni, yāna-traya) とは悟りに至る三つの道、あるいは方法を乗物にたとえたもので、多くの大乘経典では、声聞乗・縁覚乗・菩薩乗 (仏乗) の三つとして説かれている。そのうち最初の二つは二乗 (小乗) と言われ、最後の菩薩乗、あるいは仏乗を大乘と呼んでいることも周知の如くである。

しかし、このような定義が最初から成り立っていたわけではないし、その成立に関しては未だ明確な解明がなされていない。初期大乘の代表的経典である般若経においてもその成立の複雑さから、三乗思想についての十分な分析が為されてこなかった。しかし、筆者は般若経こそは三乗思想の展開を解明する有力な資料であると考えている。そこで本稿では、般若経に特有の菩薩思想を基盤に、三乗思想の成立を経典成立の段階的形成という視点で考察してみたい。

1. 菩薩を中心とする三乗という観念の成立

三乗という術語は部派仏教、厳密には北伝の部派 (有部系・大衆部系ともに) で成立したものであるが、その構成は「声聞乗・独覚乗・仏乗」の三乗をもって示される。これら三乗については、『増一阿含経』、『大毘婆沙論』、*Mahāvastu* などに見られることがすでに指摘されている¹。この三乗思想は修行者が仏果に至るための段階を説いたものであるが、基本的には菩薩乗は含まれないことが重要である。

一方、菩薩思想の発展に伴い、仏乗とは菩薩乗であると解釈するよう

¹ 藤田宏達「一乗と三乗」『法華思想』横超慧日編著、平楽寺書店、1975、pp.368.

になり、三乗を「声聞乗・独覚乗・菩薩乗」というようにもなる。さらにこの仏乗を、声聞乗・独覚乗に対して優越するただ一つの乗（一乗）と見なし、あるいは、「声聞乗・独覚乗・菩薩乗」の三乗すべてを一仏乗と見なす見解も登場する。

たとえば、『勝鬘經』で説かれる一乘法身、あるいは『法華經』で説かれる二乗を方便とする三車説、方便としての三乗と一仏乗を別に考える四車説などがそうであり、これまではこの問題をめぐって三乗思想が論議されてきたように思う²。ただし、それらの研究はいずれも大乘の三乗説が完成してから以降の発展形態を扱うものであり、初期大乘や般若經における仏乗と菩薩乗と大乘の関係や、菩薩乗を含む三乗思想については、必ずしも明らかではなかった³。

その中で筆者が目にするのは、斎藤明の「初期の大乘經典は、このような伝統的な三乗観を援用しながら、その中の仏乗の位置に、あえて「菩薩乗」さらには「大乘」の語を重ねることによって、自らの存立基盤をアピールしたものと見える。『小品般若經』以降に定着する「大乘」という自称は、明らかに伝統部派の教理を声聞乗ないしは独覚乗と見なして相対化し、その二乗、すなわち「小乗」に対する批判意識を前面に出すことになる」⁴という見解である。一部不正確な点はあるが、この見解は三乗思想の発展を分析する基盤となるであろう。以下はこの学説に基づき、般若經において三乗思想がどのように成立していったのかについて、經典に即して考察する。

2. 小品系の菩薩乗の用例

(1) 漢訳諸本の菩薩乗

最初に小品系の般若經諸本における「菩薩乗」の用例をみると、『道行』、

² 藤田宏達、前掲論文、pp.352-405。稲荷日宣『法華經一乗思想の研究』山喜房佛書林、1975年、95-129。斎藤明「一乗と三乗」『インド仏教3』岩波講座・東洋思想 第10巻、岩波書店、1989、pp.46-74。

³ 唯一の般若經の三乗思想に関する論文として、小沢憲珠「般若經と三乗」（『仏教論叢』20、1976、pp.147-151）があるが、梵本も出版される前であり、經典の三乗の記述を検討してはいない。

『大明度』、『鈔經』という古訳にこの語はない。408年羅什訳『小品』に2箇所(3例)あるのみであるが⁵、985年施護訳『仏母』には16箇所(26例)と増加する。このように、初期般若経の系統では必ずしも菩薩乘という概念が確立していたとは言えない。後代の翻訳になるに従って、次第に菩薩乘という語が用いられるようになったのである。

同じ傾向は、「仏乘」についてもいえる。仏乘は『道行』、『大明度』、『鈔經』、『仏母』にはなく、『小品』にわずか一箇所(二例)あるのみである⁶。これは三乗や仏乘と言った概念が、小品系般若の經典形成期に次第に成立していったことを物語る。さらに、その展開は般若経の菩薩思想の発展段階を検証する一つの基準となる。

(2) 『八千頌般若』の菩薩乘

以下は、梵文『八千頌般若』(AS)における三乗の用例である。これはシャーリプト長老のスーパーティ長老への反問である。

また実にスーパーティ長老よ、如来によって三種の菩薩乘〔によって修行する〕人々が説かれたが、それら三種の区別は存在しない。なぜなら、スーパーティ長老の所説では、唯だ一つの乗り物、すなわち

⁴ 斎藤明、前掲論文、pp.56-57。ただし、『小品』よりも訳出年代が古い『大明度経』には十四回(二箇所)も使用されている。一方、小乗という語は般若経ではほとんど用いられない。大般若経を除いた般若經典の中にはわずか四例あるのみ。たとえば小品般若に三回(578a29、578b3)、『光讚』に一回(198a3)、『大般若経』「第六会」の極めてまれな用法である。なお、『大般若経』「第六会」に、小乗・中乗・大乘といて、それぞれ三乗(聲聞道、独覚道、無上道)に対応させ、小乗を下劣の乗とも言い換えている。「修小乗者示聲聞道。學中乘者示獨覺道。行大乘者示無上道。如是聽法爲無上智。終不爲得下劣之乘。」(大正蔵 No.220, vol.7, 935a21-23)。梵本『八千頌般若』にも、hīna-yāna という語はない。なお、hīna-adhimuktika の用例は2例(p.216, l.4 ; p.649, l.26)あり、これを『佛母』(639c2)は「劣信解」と訳す。

⁵ 『小品』大正蔵 No.227「大如品第十五」(563c6, c7)、「阿惟越致相品第十六」(564c15)。

⁶ 『小品』「大如品第十五」(563c)。ただし、「仏道」は『道行』に一例ある。これは『道行』における修行道を示す箇所でも重要である「佛語須菩提。信般若波羅蜜者。爲不信心。亦不信痛痒思想生死識有。不信須陀洹道。不信斯陀含阿那含阿羅漢辟支佛佛道」(大正蔵 No.224, vol.8, 441a1-3)。

仏乗〔である〕菩薩乗があるだけだからである。

ye ca khalu punar ime āyusman subhūte trayo bodhisattvayānikāḥ pudgalās tathāgatenākhyātāḥ, eṣāṃ trayāṇāṃ vyavasthānaṃ na bhavati / ekam eva hi yānam bhavati yad uta buddhayānaṃ bodhisattvayānaṃ yathā āyusmataḥ subhūtir nirdeśaḥ. (Wogihara [1973 : 657, II. 15-19])

「佛説三乘人則無差別」(『小品般若』大正蔵 no.227, 563c4-5)

この例のように、『八千頌般若』のなかでは仏乗・菩薩乗をただ「一つの乗り物」(一乗)として同一視する。このシャーリプトラ長老の反問に対して、スプーティ長老は以下のように答えている。

シャーリプトラ長老よ、真如の真如なるもの、そういう真如において、声聞乗によって、あるいは独覚乗によって、あるいは大乘〔によって修行するもの〕であれ、ただ一種の菩薩さえもあなたは見るであろうか？ (Wogihara [1973 : 658, II. 19-22])

このように、シャーリプトラ長老よ、〔最高の〕真実の立場からすれば、その菩薩のありよう (bodhisattva-dharma) が認識されないのに、どうして“これは声聞乗によって修行するものである。これは独覚乗によって修行するものである。これは大乘によって修行するものである”ということが、あなたの中に生まれるであろうか？ (Wogihara [1973 : 659, II. 15-18])

このように、ASでは三乗を「如来によって説かれた三種の菩薩乗」と表明し、仏乗〔である〕菩薩乗と同一視しながら、三乗を声聞乗、独覚乗、大乘〔によって修行するもの〕(mahāyānika)とも言う。このように、この三乗が一つの乗りもの(一乗)であり、それが仏乗〔である〕菩薩乗と言い換えられている。さらに、この引用の直後のサンスクリット文には「声聞乗・独覚乗・大乘」(śrāvakayānikam vā pratyekabuddhayānikam vā mahāyānikam vā.)という三乗の用例があるが、注目すべきことにこの箇所に対応する漢訳ではすべて「声聞・辟

支仏・仏乘』とする⁷。つまり、ASでは菩薩乘・大乘・仏乗が交換可能であるのに対し、漢訳ではそうではない。特に三乗の第三は仏乗とされるのである。

(3) 『一万八千頌般若』の菩薩乘

この三種の菩薩乘と仏乗の関係は、『一万八千頌般若』において、より明らかとなる。同経(チベット語訳)は、小品系の漢訳を受けながら、さらに明快に「長老シャーリプトラよ、真如において、三種の菩薩を認めるのか? 声聞乗の菩薩、独覚乗の菩薩、仏乗の菩薩を認めるのか (*sangs rgyas kyi theg pa pa pa 'i byang chub sems dpa' 'dod dam*)」と述べる⁸。むしろ、上に引用した梵文『八千頌般若』はその仏乗を菩薩乘、あるいは大乘として強調した、より新しい文脈であると考えられる。

3. 『八千頌般若』における熟語としての三乗 (yāna-traya)

次に小品系の三乗の用例を確認しておきたい。先の三つの菩薩乘という用例の他に、『八千頌般若』では以下の用例が唯一のものである。

そこで四大王は世尊に次のように申し上げた。「世尊よ、この般若波羅蜜を手に取り、記憶し、唱え、学習し、宣布するその善男・善女が、衆生を三乗において訓練し、しかも衆生という想いを起こさないとは、希有なることです」。

atha khalu catvāro mahārājāṇo. bhagavantam etad avocat /
āścaryam bhagavan yad imāṃ prajñāpāramitām udgr̥hṇan dhārayan
vācayan paryavāpnuvan pravartayan sa kula-putro vā kula-duhitā
vā yāna-traye sattvān vinayati na ca sattva-saṃjñām utpādayati //
(Wogihara [1973 : 190, l. 15])

⁷ Wogihara [1973 : 658, ll. 5-6]. 『小品般若』(563c8-9). その他「是聲聞乘是辟支佛乘是佛乘者。如是三乘如中無差別」(『小品般若』563c12-13)などがある。

⁸ チベット語訳『一万八千頌般若』(Pek, No.732, vol.20, 162a8)も同様に仏乗である。しかし、『二万五千頌般若』になると、菩薩乗に変わってゆく。

この用例は『八千頌般若』第三章「塔品」のものであるが、対応する漢訳を見ると、七種すべての対応箇所には欠けている⁹。このように小品系統では三乗という教説は確立していなかったようである。この梵本の例外的用例は、おそらく後代の他の經典によって影響されたものと考えられる。

4. 小品系と大品系における三乗理解の相違

(1) 三種の菩薩乗

漢訳諸本に見られるように、小品系の初期の段階において菩薩乗を含んだ三乗は見られなかったし、三乗という語そのものも確実な用語とはなっていなかった。また、上記の梵文『八千頌般若』(AS)では、三乗について「如来によって説かれたこれら三種の菩薩乗〔によって修行する〕人々」(trayo bodhisattvayānikāḥ pudgalās tathāgatenākhyātāḥ) [『一万八千頌般若』(AD)、『二万五千頌般若』(PV, Chap.4)でも同様]¹⁰とするが、漢訳は『小品』「佛説三乘人則無差別」(563c4-5)、『大品』「仏説求道者有三種阿羅漢道。辟支佛道。佛道。是三種為無分別」(337c10-11)と異なっている。

もちろん上記 AS の例は唯一の例外であるが、ここで注目されるのは、<三乗とは菩薩道の三種類>と考えられていることである。ここに対応する AD (チベット語訳)も PV も、「菩薩乗の三種に区別はない」(trayānāṃ bodhisattvayānikānāṃ pudgalānāṃ vyavasthānaṃ na bhaviṣyati) と繰り返している。つまり、三乗とは菩薩の三つの修行形態を言っているのであり、これが前述した「一〔仏〕乗」の意味なのである。

(2) 一乗の意義

また、『小品』も『大品』も三乗を「聲聞乗、辟支仏、仏乗」とし、

⁹ 『道行』(431a26), 『明度』(483c10-11), 『鈔經』(513c12-13), 『小品』(541c26-27), 『佛母』(594c21-23), 『第四会』(大正7, 772c26-28), 『第五会』(大正7, 872b20-24)。

¹⁰ 『一万八千頌般若』(Aṣṭādaśasāhasrikā Prajñāpāramitā). Tib. Pek ed., No.732, Vol.20, 162a4-5. PV, Kimura [1990 : 133, ll. 18-19].

如来はこのように三種の菩薩乗を説いたとしているが、真如の立場から言えば、菩薩のあり方は一つである。この「一つの菩薩」を『八千頌般若』ASは「ただ一つの乗り物、つまり仏乗〔である〕菩薩乗だけがある」(ekam eva hi yānaṃ bhavati yaduta buddhayānaṃ bodhisattvayānaṃ) とする。

この「ただ一つの乗り物」に対する小品系漢訳諸本を見ると、『道行』(454a)、『大明度』(494b)、『鈔経』(526b)は「一道」と訳し、『小品』(563c)は「一乗〔人〕」と訳した。確かに、これは後代の一乗思想の萌芽として、注目される思想であるが、同一ではない。あくまで菩薩道を重視する思想の中で述べられた文脈にすぎない。

さらに、このフレーズは小品系の『一万八千頌』(チベット語訳)「一仏乗」を経過し、『放光』(大正8, 85b)、『大品』(大正8, 337c)、『第二会』(大正7, 258a)の「一正等覚乗」となり、さらにPVで「ただ一つだけの菩薩・摩訶薩となる。すなわち長老スプーティが説いた菩薩乗である」(Kimura [1990 : 133, 20-22])とし、般若経の拡大・発展とともに次第に菩薩乗に視点が移ってゆく。

おそらく、ASの「ただ一つの乗り物、つまり仏乗〔である〕菩薩乗だけがある」(ekam eva hi yānaṃ bhavati yaduta buddhayānaṃ bodhisattvayānaṃ)という主張は、一乗思想を説いたものというより、この菩薩乗〔について修行するもの〕(bodhisattvayānika) と言うことになる。

一方、PVも「これら三つの菩薩乗の人々」¹¹といい、続けて「菩薩摩訶薩はただ一つとなるだろう。つまり〔長老スプーティが説いたような〕菩薩乗である」(eka eva bodhisattvo mahāsattvo bhaviṣyati yad uta bodhisattvayāniko) (*ibid.*, p.133, l. 21) とし、三つの菩薩乗を、「声聞乗の菩薩、独覚乗の菩薩、菩薩乗の菩薩」(*ibid.*, p.134, ll. 2-3)、あるいは「声聞乗の菩薩、独覚乗の菩薩、仏乗の菩薩」(*ibid.*, p.134, ll. 16-17) とする。

(3) 仏乗から菩薩乗へ

一方、上記の箇所に対応するチベット語訳『一万八千頌般若』(162a5-6)

¹¹ Kimura [1990 : 133, ll. 19-20] .

では、「長老スプーティによって説かれように、“菩薩摩訶薩はただ一つの仏乗に属するものである” (byang chup sems dpa' sems dpa' che po ni sangs rgyas kyi theg pa pa gcig bur 'gyur ro)」とする。

この「一つの仏乗に属するもの」に対応する大品系漢訳諸本を見ると、『放光』(85b)「一乗」、『大品』(337c)「一菩薩乗」、『第二会』(大正蔵7, 258a)「一菩薩乗、一正等覺乗」となり、次第に仏乗が消えてゆく。

さらにPVでは、「ただ一つだけの菩薩・摩訶薩となる。すなわち長老スプーティが説いた菩薩乗である。」(Kimura [1990: 133, 20-22])とし、時代を追って菩薩乗に視点が移ってゆく。このように、「仏乗の菩薩」は「菩薩乗の菩薩」へと入れ替わる。なお、大品系最古訳の『放光』(85c2)では、三乗を「羅漢乗、辟支佛乗、菩薩佛乗」とするように、菩薩乗は独立しておらず仏乗と一体である。これはまさに小品系と大品系の中間形態を示すものである。

いずれにせよ、三種の菩薩乗という考え方は小品系・大品系に共通であるが、ASが三乗の最後に菩薩乗を取らずに、大乘あるいは仏乗を配置するのに対し、『一万八千頌』は「仏乗」、『放光』は「菩薩仏乗」、PVは菩薩乗をとる。ここにおいて、後代の三乗の觀念が次第に確立される過程がわかる。

まとめ

以上のように般若經の三乗思想と言っても一様ではなく、部派仏教の「声聞・獨覺・仏」という三乗思想から、菩薩思想の発展に伴って、三つの菩薩乗という思想を介在して、第三の仏乗を菩薩乗と読み替え、「声聞・獨覺・菩薩」という形に変化してゆくのであり、その故に、仏乗から菩薩乗、大乘、一乗という変化が、小品から大品、さらには漢訳諸本の新古の中に、時代を追って読み取ることができたのである。それを般若經の資料と関連させて見ると、以下のような段階的発展が指摘できる。

- (1) 初期の小品系統では三乗という教説は確立していなかったが、小品系以降になると三乗という語も見られるようになる。
- (2) <小品系統>では三乗の第三は菩薩乗ではなく仏乗とする。梵本

『八千頌般若』の唯一の例は後代の他の大乘經典からの影響と見られる。

- (3) 『一万八千頌般若』では三種の菩薩道についての明確な概念化が見られ、一仏乗といった思想も生まれる。
- (4) 大品系統では三乗の第三は菩薩乗に集約されてゆく。また、大乘という意識も明確になり、菩薩乗こそが大乘であるとも言われる。

以上が明らかとなったわけであるが、問題は般若経の中でこれらが重層的に説かれているために、般若経における三乗思想とはどのようなものかについて、明確な論述が導き出せないことである。そのためもあって、これまで般若経の三乗説を論じながら、ほとんどの研究者が、一つの文献を平面的にとらえ、結果として最も発展した形態の三乗説を重視していたのである。

たとえばそれは、『法華経』「方便品」が主張する一仏乗が、部派仏教の三乗思想に基づくものなのか、般若経の「声聞・独覚・菩薩」の三乗を意識して説かれたものか、というような二者択一の見解に見られるようなものである。

もちろん、そのような三乗説も説かれているから間違いとは言えないが、上記に纏めたような般若経の重層的な構成に基づいた視点が必要なのである。

また、その後の大乘仏教における三乗思想の影響という意味からも、この「般若経の内部での発展」という視点をもって、三乗思想を考察する意味は大きい。それが、法華経などの大乘經典と影響関係を考察する重要な資料となるのは間違いないからである。

たとえば、『法華経』「譬喩品」の梵本 (KN 79, p.6, p.10) では bodhisattva-yāna とあるが、鳩摩羅什訳では菩薩乗ではなく、仏乗とする例が見られる¹²。このことから、無理に両本を会通させて菩薩乗と仏乗を同一視する向きもあるが、石田¹³も指摘するようにサンスクリッ

¹² 第三の乗に関して、「譬喩品」では鳩摩羅什訳が「仏乗」(『妙法華経』大正蔵 No.264, 13b9, 13b13)、竺法護訳が「菩薩之道」(『正法華経』大正蔵 No.263)とする。

¹³ 石田智宏「法華経における三乗と大乘」『仏教学』52, 2010, pp.43-57.

(34)

ト写本の異読に注意するならば、これらの例も般若経の三乗思想と同様、漢訳の古い形の仏乗からサンスクリット本の新しい表現である菩薩乗へと変えられていったものと見なすべきであろう。そこに同一経典の中に見られる三乗思想の発展を読み取るべきなのである。

【略号】

[Kimura 1990] : Takayasu Kimura ed., *Pañcaviṃśatisāhasrikā Prajñāpāramitā* (二万五千頌般若) IV, Sankibo Busshorin Publishing Co., Ltd.: Tokyo, 1990.

[Wogihara 1973] (W ed) : U. Wogihara, *Abhisamayālamkāralokā Prajñāpāramitāvyākhyā, The Work of Haribhadra*, Sankibo Busshorin Publishing Co., Ltd.: Tokyo, 1973 (1st Pub., The Toyo Bunko: Tokyo, 1932).